

11 EbのEntrada

—A.D.378のティカルの政変—

佐藤 孝裕

1. はじめに

マヤ Maya 地域におけるテオティワカン Teotihuacan の影響が議論されるようになったのは、20世紀後半である。テオティワカンの建築・芸術様式が、マヤ地域を始めとするメソアメリカ Mesoamerica 各地で軍事的事象を表すと解釈される図像と結びついて見い出されるようになったことから、テオティワカンがメソアメリカにおける征服帝國的存在だったとする説が唱えられるようになったのである (Pasztory 1993)。軍事的征服とまではいかないにせよ、1970年代の終り頃まで、マヤの諸国家の形成はテオティワカンとその交易者の刺激に帰すると考えられていた (Sanders and Price 1968; Rathje 1971; Santley 1983; Demarest and Foias 1993; Pasztory 1993)。ただ、1980年代に入って以降、マヤの国家とテオティワカンとの間の強力な交易関係の存在は認めるものの、それ以上の関係、すなわちテオティワカンによるマヤ地域の経済的支配に関しては否定的な意見も提出されるようになった (Becker 1983)。表面的にはテオティワカンの模倣と見られるような現象は生じたが、拠って立つ文化的基盤はマヤ独自のものであり続けたというのである。

確かに、直接的にせよ間接的にせよ、マヤ地域の国家がテオティワカンと何らかの関係を持っていたことは否定し難いが、だからといってそれが古典期マヤ社会の勃興に影響を与えたとは考えられない (Cowgill 1979)。というのも、テオティワカンが強国として成長する数世紀前に、マヤ地域にはエル・ミラドール El Mirador、ナクベ Nakbe、カラクムル Calakmul、ラマナイ Lamanai、セロス Cerrros等の、巨大建築コンプレックスを擁する複雑な国家が成立しており、また神聖王権の存在を窺わせる図像、石彫などのモニュメントの建立⁽¹⁾、巨大建築、大規模な人口を擁する都市の誕生などが示すように、マヤ低地南部における国家の成立はテオティワカンとの接触到先立つからである (Demarest and Foias 1993; Braswell 2003a; Marcus 2003)。古典期マヤ地域を代表する国家ティカルTikalにおいても、古典期前期が始まったばかりの250年頃、「失われた世界」Mundo Perdidoと呼ばれる地区に、高さが30mを超えるような大ピラミッド (5C-54) が建設されているのである (Laporte 2003b)。

この発展の一因を、長距離交易を中心とする経済的要因に求める説がある。マヤ地域における長距離交易の歴史は古く、ティカルでも既に先古典期中期の始め頃 (前800～前600年) には、グアテマラ産と見られる黒曜石やベリーズ産の珪岩でできた日用品が見い出される (Moholy-Nagy 2003)。先古典期後期には、ヒスイ、黒曜石、黄鉄鉱などの貴重品目の交易を支配するエリートが主導する低地南部の国家が、メソアメリカの長距離交易網に参加するようになり、この長距離交易というシステムの中で王権が誕生したというのである (Reese-Taylor and Walker 2002)。いずれにせよ、重要なのはテオティワカンが古典期メソアメリカ文明の中心にあったかどうかではなく、そ

の影響力が実際にどの程度のものであったかということである (Pendergast 2003)。

現在、テオティワカンのティカルへの影響に関する仮説は、いわば二極化している。一方が4世紀末にテオティワカンがティカルを始めとするマヤ地域の国家を軍事的に侵略したというものであり、もう一方はティカル等に見られるテオティワカン様式の建築物や出土物の存在は、自らの威信と正統性を示すシンボリズムとそれにかかわる軍事的イデオロギーを利用した結果であるというものである (Stuart 2000)。この両者は、テオティワカンがマヤに与えた影響の程度がどのくらいだったか、テオティワカンとマヤの間の相互作用によって刺激を受けた政治・社会・経済上の変化がどのくらい続いたか、及びその相互作用においてマヤがどの程度受動的受容者で逆にどの程度能動的参加者とみなされるかという主として三つの点で異なっている (Braswell 2003a)。

テオティワカンの影響がマヤ地域に及んだ証拠としてしばしば引用される史料は、記述あるいは描写によって情報を伝える歴史学的史料と、出土物や、建築物等の遺構自体から成る考古学的史料の二つに大別できる。前者は、石碑等の石造モニュメントや建築物、及び土器などの出土物に刻まれた文字史料と描かれた図像 (iconography) である。後者は、タルー=タプラーロ Talud-tablero 様式の建築、パチューカ Pachuca 産緑色黒曜石、薄手オレンジ土器や円筒形三脚土器などの土器、土偶、黄鉄鉱の鏡などである (Demarest and Foias 1993; Fash and Fash 2000; Iglesias Ponce de Leon 2003; Torrecilla and Braswell 2003)。この全てを分析するのは、紙数の関係上本稿では不可能である。そこで、本稿では主として碑文等の文字史料に焦点を絞り、それ以外の史料は適宜援用するという手法で、マヤ地域におけるテオティワカンの存在の実態について分析を進めたい。

2. 「エントラダ」とは何か

(1) 碑文史料に基づく分析 ① 四つのモニュメントの内容

マヤ地域とテオティワカンの関係を考える上で鍵になると目されているのが、いわゆる「エントラダ」Entrada (Martin and Grube 2000)、あるいは「11 エブEb事件」(Stuart 2000) と呼ばれている出来事である。これは、テオティワカンあるいはそれと何らかのかかわりのある勢力が、ペテン Peten 地方に侵入したとされている出来事である。その日付 8.17.1.4.12 11 Eb 15 Mak (378年1月13日) は、ティカルの石碑31とマルカドール Marcador、ワシャクトゥン Uaxactun の石碑5と石碑22の四つの石造モニュメントに記されている。カトゥン Katun の完了のような暦の節目以外の、恐らくは記録に残す価値のある歴史的な出来事が起こったと考えられる日の日付が複数の遺跡で記されるのは極めて少なく (Mathews 1985; Schele and Freidel 1990)、この日がいかに重要であったかが推測できる。そこで、この日付の刻まれた上記四モニュメントについて、以下で検討してみたい。

ワシャクトゥンの石碑5は、マヤ低地南部におけるテオティワカン人の存在の最古の同時代史料とされてきたものであり (Coggins 1983)、四つのモニュメントの中でも、刻まれた日付と同時代の唯一のモニュメントである。つまり、「エントラダ」に関して記された唯一の同時代史料である。

ここでは8.17.1.4.12の日付の後に、'hul-iy Siyaj K'ak' Mutu' ls⁽²⁾ - ' ' すなわち「ティカルのシヤフ・カック Siyaj K'ak' が到着した」と記されている (Mathews 1985; Stuart 2000; Braswell 2003a)。この記述から、シヤフ・カックなる人物がティカル出自であることは明白である⁽³⁾。ただ、アハウ Ajaw 等の称号を伴っていないため、彼がどのような地位にあった人物だったかは判明しない。シーリとフレイデルは、シヤフ・カックが常にティカルの紋章文字を伴っていることを根拠に、ティカル出身のアハウだったとしている。ワシャクトウンに対する戦勝の軍功として、当時のティカル王チャック・トック・イチャーク1世 Chak Tok Icha'ak I からワシャクトウンのアハウに即けてもらったというのである (Schele and Freidel 1990)。同時期にティカルにはチャック・トック・イチャーク1世という王が在位していたのに加え、シヤフ・カックがティカル王位に即いたことを示す史料が存在しないため (Marcus 2003)、現時点では彼をティカル王 (アハウ) と考えることはできないが、少なくとも、事績を肖像と共に刻んだ石碑を建立している上、そこに記された日付が恐らくは歴史的表象が複数の遺跡で共有された最古の事例のものであるからには (Mathews 1985)、かなり重要な高位の人物であったことだけは間違いないであろう。

378年の出来事を記念して、126年後の9.3.10.0.0 (504年12月7日) にワシャクトウン王⁽⁴⁾が建立したのが石碑22であり、シヤフ・カックの名が「到着」の文字と共に記されている (Stuart 2000; Schele and Freidel 1990)。このことから、378年に起こったことと、それを主導したシヤフ・カックの重要性が窺える。

同じく「到着」を懐古的に記しているのがティカルの石碑31である。これはシヤフ・チャン・カウィール2世 Siyaj Chan K'awiil II が建立したモニュメントである。この石碑の背面には、ティカルの歴史上の記録が詳細に記されている。その中で、チャック・トック・イチャーク1世が8.17.0.0.0 1 Ajaw 3 Ch'en (376年10月18日) のカトゥーン完了の儀式を主宰したことに続いて、8.17.1.4.12という日付が刻まれ、更に 'tsts-uy ok' 「旅 (歩行) は終わった」と恐らく解読できる文字が生起している (Stuart 2000)。これはワシャクトウンの石碑5と石碑22に記されている「到着」とほぼ同義とみなすことができよう。その行為の主体として、シヤフ・カックの名がオチキン・カウィール Och-k'in K'awiil すなわち「西のカウィール」という称号を伴って挙げられている。続いて、'och-ha' 「水に入る」という動詞とチャック・トック・イチャーク1世の名が記されている。古代マヤでは、地上は原始の海に浮かんでいると考えられていた。また、セノーテ cenote は死者の国である地下世界のシバルバ Xibalba への入り口であり、死者が地下世界におもむく時には、洞窟か静水を最初に通ると考えられていた (Miller and Taube 1993)。従って、「水に入る」という表現は、死ぬことの隠喩だと考えられる。つまり、「西のカウィール」であるシヤフ・カックが到着した同日、チャック・トック・イチャーク1世は死んだということになる。

ティカルのグループ6 C-XVIで出土したのが、球戯に用いられた標識のような形をした石造モニュメント、いわゆるマルカドールである。その碑文中A7-B8を、スチュアートは 'hul-ye siyaj-k' ahk' kal-ma-te' と解読している (Stuart 2000)。更にゼンダー Zender は、A9-B9を 'aj-yo'-

otoot'-nal' mut-chan-na-ch'en'' と解釈している。B8-B9は称号を形成しており、全体を通すと「ムトゥ・チャン・チェン家のカロームテ Kaloomte'であるシヤフ・カックが到着した」と解釈できる (Braswell 2003a)。E1-E5には、「槍投げ器フクロウ」Spearthrower Owlが8.16.17.9.0 11 Ajaw 3 Wayeb (374年5月1日)に即位したことが記されている (Stuart 2000; Martin and Grube 2000)。そこでは、彼がカロームテであり、ホ・ノフ・ウィッツ Ho' Noh Witz という国の第4代王だとしている。当時のティカル王がチャック・トック・イチャーク1世だったことも考え併せて、彼が少なくともティカルの王でなかったことは明らかである。

(2) 碑文史料に基づく分析 ② 「エントラダ」にかかわった中心人物

以上を整理すると、「エントラダ」とは、8.17.1.4.12に「西のカウィール」であり、ムトゥ・チャン・チェン家のカロームテであるティカル出自のシヤフ・カックが到着し、ティカル王チャック・トック・イチャーク1世が恐らく死去した出来事であるということになる。しかし、これでは余りに単純に過ぎ、一体この日に何が起こったのか全く判然としない。そこで、次に以上の碑文史料の内容を「エントラダ」にかかわった人物という観点から整理することで、この出来事の本質についてもっと詳細に検討してみたい。

(a) シヤフ・カック

シヤフ・カックは、この出来事の主役ともいえる人物である。彼はティカル王家の出自であり (ワシャクトウンの石碑5)、ムトゥ・チャン・チェン家のカロームテという称号と共に (マルカドール) (Braswell 2003a)、「西のカウィール」という称号も保持していた (ティカルの石碑31) (Stuart 2000)。この「ムトゥ・チャン・チェン家」が何なのかは明らかになっていない。ラポルテとフィアルコは、シヤフ・カックがティカルの王族の一、とりわけチャック・トック・イチャーク1世の家系に対抗しうる名門の出身であり、従って彼の「到着」はティカル外の人間がティカルに現れたのではなく、外地から帰還したことを意味するとしている (Laporte and Fialko 1990)が、もしそうであれば、この「ムトゥ・チャン・チェン家」という名称がシヤフ・カックの属する家系の名称なのかも知れない。また、シーリとフレイデルは、シヤフ・カックがチャック・トック・イチャーク1世の兄弟であると想定し、更に「槍投げ器フクロウ」も 'ihtan'⁽⁶⁾兄弟 (マルカドール) であるとしている (Schele and Freidel 1990)。シヤフ・カックが少なくともティカル王家の出自で、チャック・トック・イチャーク1世の親族というブラスウェルの主張は十分検討に値すると思われる (Braswell 2003a)。カロームテの称号を授与されたティカルの実質的最高位の支配者だったが、アハウではなかったためティカルの王名表に記されていないだけで、アハウ位に即位したヤシュ・ヌーン・アイーン1世 Yax Nuun Ayiin I が成年に達するまで摂政兼王国の保護者としての役割を果たしたというのである。事実、彼の名はヤシュ・ヌーン・アイーン1世の大王 (overlord) として二度言及されているのである (Martin and Grube 2000)。

シヤフ・カックの名は、ティカルの墳墓116出土の骨製品のMT (雑テキスト) 32と MT34 にも刻まれていると思われ、特に後者では8.17.0.15.7 9 Manik' 10 Xul (377年8月21日)の日付が

伴っている (Stuart 2000)。これは彼がティカルに到着する145日前の日付であるが、この日が何を意味するかは不明である。また、彼の名はティカルの西方78km、サン・ペドロ・マルティル San Pedro Martir 川のほとりに位置するエル・ペルー El Peru の石碑15でも、8.17.1.4.4 3 K'an 7 Mak (378年1月5日)、すなわち「到着」の8日前の日付と、「到着」と読めそうな文字と共に刻まれていることから、この川沿いにエル・ペルーを経由してティカルに到着したと推測されている (Martin and Grube 2000; Stuart 2000)。その到着の日が、8.17.1.4.12である (ワシャクトウンの石碑5と石碑22、及びティカルのマルカドールと石碑31)。ティカルとワシャクトウンの両者で「到着」という出来事が記されていることから、これはワシャクトウンも含む地域への「到着」と考えられる。ティカルの石碑4に、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世の名の後に 'y-ajaw' 「~のアハウ」という文字とシヤフ・カックの名が続いていることと、ティカルの石碑31に8.17.2.16.17 5 Kaban 10 Yaxk'in (379年9月10日) のヤシュ・ヌーン・アイーン1世の即位に際して、'u-chab-hi Siyaj K'ak' 「シヤフ・カックがそれを監視する」という文字が生起していることから、シヤフ・カックがヤシュ・ヌーン・アイーン1世より優位にあり、彼の即位を後援したことが窺える (Stuart 2000)。その後、リオ・アスル Rio Azulの石碑1の8.17.16.12.2 (393年3月25日) の日付が記されたテキストに、サック・バラム Zac Balam 王と共に名前が言及され (Adams 1999)、更にティカルの北西約20kmにあるベフカル Bejucal で、8.17.17.0.0 11 Ajaw 3 Tzec (393年7月21日) の日付と共に、この国のユネ・バラム Yune' Balam王が恐らくはカロームテであるシヤフ・カックらしき人物の臣下であったとする文脈の記述が見られる (Stuart 2000)。そして、自らはワシャクトウンに留まり、8.18.0.0.0 (396年7月8日) にカトゥン完了を祝す儀礼を執行している (ティカルの石碑4) (Schele and Freidel 1990)。これらのことから、ティカル王国の実質的支配者はヤシュ・ヌーン・アイーン1世ではなくシヤフ・カックであり、彼がワシャクトウンを本拠地にして、かなりの領域を支配していたことが推測できる。

(b) 「槍投げ器フクロウ」

ヤシュ・ヌーン・アイーン1世の父である (ティカルの石碑31) 「槍投げ器フクロウ」は (Stuart 2000)、8.16.17.9.0 11 Ajaw 3 Wayebにホ・ノフ・ウィッツの第4代王として即位しており、カロームテであった (マルカドール) (Martin and Grube 2000; Braswell 2003a)。この人物を表す文字に関しては、特定の個人を表す固有名詞ではないとする説もある。たとえば、プロスクリアコフは外来者を示す文字だとしているし (Proskouriakoff 1993)、グルーベ、フレイデルとシーリは戦争の称号だとしている (Schele and Freidel 1990; Grube and Schele 1994)。これに対し、スチュアートは以下の諸点を論拠に反駁している。すなわち、「槍投げ器フクロウ」を表す文字が①ヤシュ・ヌーン・アイーン1世の父の名が来るべき位置に生起している、②カロームテの称号と共に生起している、③ 'och bin' 「死」文字を伴っている (Stuart 2000)。従って、「槍投げ器フクロウ」は歴史上実在した人物であり、テオティワカン王であった可能性があるとする。この他にも、これまで名前が判明している人物の異字体あるいは称号だとする説もある。例として、シヤフ・カック

(Braswell 2003a) やチャック・トック・イチャーク1世 (Schele and Freidel 1990; Culbert 1991) などが挙げられる。前者に関しては、後に述べるように、「槍投げ器フクロウ」がシヤフ・カックの到着を「目撃」あるいは「是認」しているという記述があることから (マルカドール)、この両者は明らかに別人である。後者については、「槍投げ器フクロウ」の即位が8.16.17.9.0 11 Ajaw 3 Wayebであるのに対し、チャック・トック・イチャーク1世のそれは8.16.3.10.2 11 Ik' 19 Sek (360年8月5日) と、はっきり齟齬をきたしている。それに加えて、チャック・トック・イチャーク1世がティカルの第14代王であるのに対し、「槍投げ器フクロウ」は現在のところ未同定のホ・ノフ・ウィッツの第4代王であり、やはり全くの別人と断じざるを得ない。一方、テオティワカンがティカルよりも古い歴史を有すると考えられるのに、彼が第4代という比較的新しい歴史の国の王であること、国名がホ・ノフ・ウィッツであること、そしてマヤ語の、従ってマヤの王権の概念に依拠する地位に即していることから、「槍投げ器フクロウ」をテオティワカン王とはみなし難い⁽⁶⁾。現段階では、「槍投げ器フクロウ」は現在名前が判明しているどの人物とも異なり、またテオティワカンでもティカルでもないが、ティカルと何らかのかかわりを持つ比較的新しい国の王と考えるのが穏当であろう。恐らくティカルの北方約65kmに位置する現在のナーチトゥン Naachtun のことだと考えられているマーサル Maasal⁽⁷⁾ 王が、「槍投げ器フクロウ」の 'y-ajaw' 「臣下」であることから (Martin and Grube 2000)、ホ・ノフ・ウィッツとはペテン地方か、あるいはその近郊の国であり、ティカルの王族から分かれ出た一族が建てた国と考えるのが妥当であろう⁽⁸⁾。そもそもペテン地方北東部は、ナクベヤエル・ミラドールといった大都市の存在に見られるように、マヤ低地の中にあつていち早く発展した場所であり、いわば先古典期のマヤ地域の先進地域であった。更に、古典期に入ってからは、先ずティカル、少し遅れてカラクムルと、古典期を代表する二大国が繁栄し、鎬を削ったのもこの地域であった。遠く離れたメキシコ中央高原のテオティワカンもホ・ノフ・ウィッツに擬すよりも、この地域に候補地を求める方が相応しいし、現実的であろう。

マヤ低地内で8バクトゥン Baktun に日付を刻んだ石碑を建立した都市を列挙すると、8.12.14.8.15 という最古の日付を持つ石碑29を建てたティカル⁽⁹⁾を始めとして、ワシャクトゥン⁽¹⁰⁾、シュルトゥン Xultun⁽¹¹⁾、ヤシュハ Yaxha⁽¹²⁾、エル・サポーテ El Zapote⁽¹³⁾、バラクバル Balakbal⁽¹⁴⁾、ウォラントゥン Uolantun⁽¹⁵⁾ と、全てペテン地方に位置しているのである。これらの都市を中心とする国家は、少なくとも当初は政治的に対等であり、相互に競争していたと目されているが (Sharer 1994)、中にはティカルの支配王朝から分かれた国もあつたのではなからうか⁽¹⁶⁾。実際、中にはウォラントゥンやエル・サポーテのように、ティカルの紋章文字が使われている都市もあるのである (Culbert 1991)⁽¹⁷⁾。

ただ、「槍投げ器フクロウ」を表すとされている文字は多様であり (図1)、この全てが本当に同一の人なり称号なりを表しているのか再検討の必要があるのではなからうか。たとえば、ティカルの石碑31の正面の肖像でシヤフ・チャン・カウィール2世 Siyaj Chan K'awiil II が持ち上げている頭飾りの中の楕円状の浮彫りに刻まれている動物は、「槍投げ器フクロウ」を表すとの解釈が一般

的であるが、むしろワシではないかという指摘もなされている (図2) (von Winning 1987)。同様のことは他の文字についてもいえる。また、棒状のものを握っている手首という構図は、斧を持つ神を示すとされる (Grube, ed. 2000) カロームテを表す文字にも見られるものであるが (図3)、何らかの関連はないのであろうか。

いずれにせよ、「槍投げ器フクロウ」文字で表された人物は、シヤフ・カックの到着を 'yi-ta-(hi)' 「目撃」あるいは「是認」⁽¹⁸⁾ している (マルカドール) (Stuart 2000)。死去したのは9.0.3.9.18 12 Ets'nab 11 Sip (439年6月9日) である (ティカルの石碑31) (Martin and Grube 2000; Stuart 2000)。これは、彼の孫に当たり、この石碑31を建立したティカル王シヤフ・チャン・カウィール2世の治世下である。
(c) ヤシュ・ヌーン・アイーン1世

「槍投げ器フクロウ」の息子と主張しているが (Marcus 2003)、チャック・トック・イチャーク1世の息子との説もある (Schele and Mathews 1998)。「槍投げ器フクロウ」の息子という点について、ブラスウェルは、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世の母は「槍投げ器フクロウ」と結婚するためにホ・ノフ・ウィッツに送られた女性であり、チャック・トック・イチャーク1世と最も近い縁者だったためにアハウ位を継承できたとしている (Braswell 2003a)。シヤフ・カックの項でも述べたように、ティカルの石碑4と石碑31の記述から、「エントラダ」の翌年の即位に際してシヤフ・カックがヤシュ・ヌーン・アイーン1世を

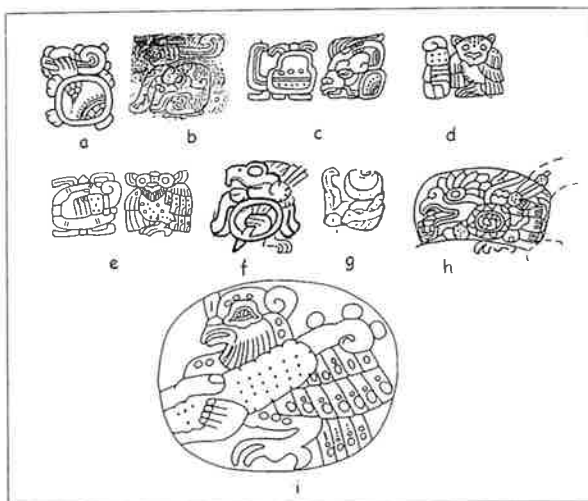


図1 「槍投げ器フクロウ」を表すとされる文字 (Stuart 2000 : 図14.15より)

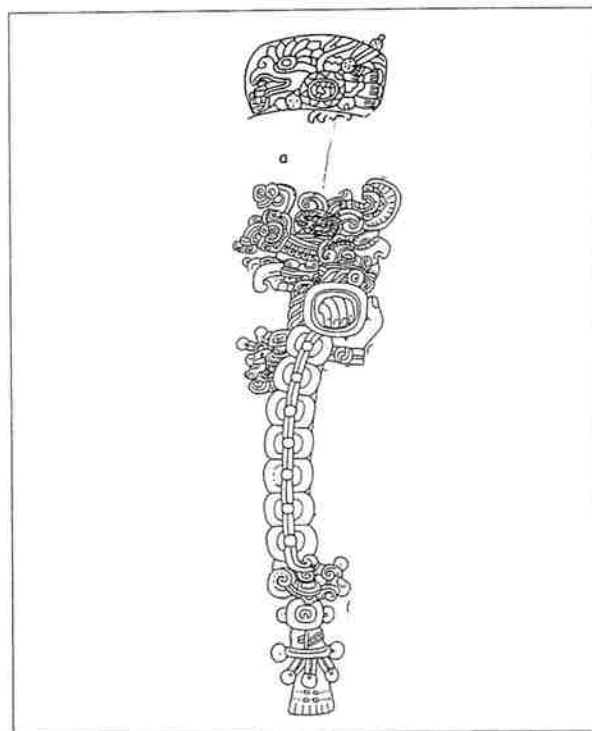


図2 ティカルの石碑31 (Stuart 2000 : 図15.16より)

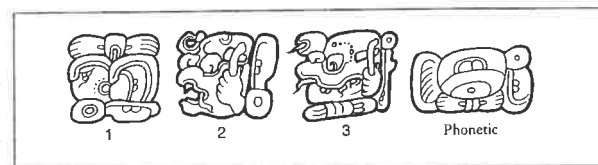


図3 カロームテを表す文字 (Coe and Van Stone 2001 : p.76より)

後援したと考えられる (Stuart 2000)。そして、シヤフ・カックの死に伴い、402年にカロームテに即く (石碑31) (Harrison 1999)。つまり、シヤフ・カックの死によって、ようやく最高位に即くのである。死去に関しては諸説あり、エル・サポーテの石碑5には420年とあり (Harrison 1999)、石碑31には恐らく8.18.8.1.2 2 Ik' 10 Sip (404年7月26日) と刻まれていると考えられているが、406年に生存していたとする「ティカルの男」Hombre de Tikalの記述が正しければ、後者は成り立たない (Martin and Grube 2000)。

(d) チャック・トック・イチャーク1世

恐らくは8.16.3.10.2 11 Ik' 10 Sek にティカルの第14代王として即位し、「失われた世界」にある8.17.0.0.0のカトゥン完了を祝うために建立された石碑39 (Ayala Falcon 1987) に、捕縛された捕虜を踏みつける姿で描かれている (Martin and Grube 2000)。また、「ティカルの男」は彼の姿の造形だと考えられている (Laporte 2003b)。8.17.1.4.12に名前の後に 'och-ha' 「水に入る」という文字が続いていることから、この日に死去したと考えられる。「エントラダ」が起こった日に死去したことは唐突であるが、十分な葬儀が施されていることから、プラスウェルはチャック・トック・イチャーク1世は後継者を決定する前に自然死しただけであり、跡を継いだヤシュ・ヌーン・アイーン1世はアハウ位を継承できる最近縁者だとしている (Braswell 2003a)。

3. 「到着」の意味

8.17.1.4.12という日付が刻まれた四つのモニュメントの碑文の内容をみてきたのだが、ここで問題になるのは、この日に実際に何が起きたのかということである。換言すれば、ワシャクトウンの石碑5と石碑22に記された「到着」、及びティカルの石碑31の「旅 (歩行) は終わった」は何を意味するのかということである。

この「到着」という表現に関して、マーティンとグルーベは、一種の政治的乗っ取りか軍事的征服を指すものであり、マヤ人を含むメソアメリカの諸民族にとって新王朝の樹立を意味するとしている (Martin and Grube 2000)。スチュアートも、ドス・ピラス Dos Pilas の王家からナランホ Naranjo の王家に嫁ぎ、ナランホの再生に貢献した「六の空姫」Lady Six Sky の例を引いて、「到着」が外来者の出現による重要な政治的変化にかかわっているとしている (Stuart 2000)。ナランホの石碑24のC7-C10に刻まれている「六の空姫」の「到着」は、9.12.10.5.12 (682年8月27日) のことであり (Stuart and Houston 1994)、この出来事がナランホを強大化したカック・ティリウ・チャン・チャーク K'ak' Tiliw Chan Chaak 王の誕生につながったという意味で、確かに結果的にはナランホの再興に資したことになる (Martin and Grube 2000)。しかし、それはあくまで結果論であり、「到着」という記述にそのような先の出来事の意味合いを持たせるのは過度の深読みであろう。

いずれにせよ、「到着」文字が生起する歴史的事例の意味合いは、そのように限定的なものではない。たとえば、ペテシュバトゥン Petexbatun 地域の代表的都市ドス・ピラスの碑銘の階段2の中

中央部の第5段のE1-F2には、9.9.16.6.13 7 Ben 16 Xul (629年6月27日)の日付と共に、'hul(-i) b'alah chan k'awil k'uhul mutal ahaw' 「神聖なムタル(ドス・ピラス)王バラフ・チャン・カウィールBalaj Chan K'awiilが到着した」(Boot 2002)との記述が見える。これは、ドス・ピラスの建国と同一時期であり、恐らくはティカルの王家の一員であったバラフ・チャン・カウィールがこの地にやって来て、新たな国を建国したことを意味すると思われる。その場合、新国家の建国とはいえ、同一王朝内の出来事であり、新王朝の樹立でもなければ外来者による他国への侵入でもない。碑銘の階段2の西部の第4段のE1-F2には、9.12.5.10.1 9 Imix 4 Pax (678年1月8日)に 'chan pax hul(-i) "dragon" ha' b'alah chan k'awil u-chan tahal mo' k'uhul ahaw'⁽¹⁹⁾ 「タハル・モの守護者(あるいは捕獲者)である神聖なムタル(ドス・ピラス)王バラフ・チャン・カウィールがドス・ピラスに到着した」(Boot 2002)と刻まれている。この文における「到着」には、単なる帰着の意味合いしか感じ取れない。また、ティカルの石碑17にも、第21代王とされるワク・チャン・カウィールWak Chan K'awiil(「二重の鳥」Double Bird王)の事績を記した文の中に、'i-huli' 「ここに到着した」と読める文字が見られる(Martin 2001)。その後9.5.3.9.15 12 Men 18 K'an'k'in (537年12月27日)という日付が続いているので、恐らくその日の出来事と思われるのだが、これは追放されていたバラフ・チャン・カウィールがティカルに戻って来たことを意味するのかも知れない(Martin 2001)。このように、「到着」は必ずしも軍事的征服や新王朝樹立、ましてや外来者の出現による政変を意味しない。

さて、では8.17.1.4.12に、同時代及び後世にも言及され回顧されるほど重要な何があったのであろうか。これに関しては、マヤ地域内の国家間の出来事、すなわちティカルとワシャクトウンとの抗争であるとする説と、マヤ地域、とりわけ当時のマヤ地域の代表的国家ティカルへのテオティワカンという外部勢力の侵攻であるとする説に大別することができよう。

前者の立場に立つマシューズは、戦争であればティカルが王家の一員をワシャクトウン王として押しつけたのであり、結婚であればティカルの王族がワシャクトウンの支配王朝に婿入りしたと推測している(Mathews 1985)。シーリとフレイデルは、8.17.1.4.12はティカルのワシャクトウンに対する戦勝記念日と考えている。ティカル王チャック・トック・イチャーク1世から遣わされたシヤフ・カックが、軍を率いてワシャクトウンを攻め、征服したというのである(Schele and Freidel 1990)。実際、シヤフ・カックはその後にもワシャクトウンに留まり、18年後に石碑4で8.18.0.0.0のカトゥン完了の儀礼を執行している。しかし、この碑文中に戦争を表す文字はなく、これは残りの三つのモニュメントにも共通している(Stuart 2000)。その意味では、ティカルのワシャクトウンに対するものであれ、テオティワカンのティカルに対するものであれ、この日に征服戦争があったという文字史料上の証拠はない。

これに対し、考古学的観点からマヤ地域、とりわけティカルの勃興や隆盛をテオティワカンとの関係に帰す説が以前からあるが、近年特に目立つのが碑文や画像資料に依拠してテオティワカンの直接的侵攻とその結果としての支配を主張する説である(Martin and Grube 2000; Stuart 2000)。

古代マヤ文明の代表的概説書である『マヤ人The Maya』の著者であり、斯界の泰斗であるマイケル・コウも、最新の第六版の前書きの中で、第五版との違いについて「恐らく最も顕著な研究上の進展は、新たな文字や図像がもたらす情報に基づき、恐らくはテオティワカンの勢力が北部ペテンや南東部のコパン Copan に軍事的に侵入し、新しい王朝を樹立し、また外来の新たなイデオロギーを確立したことである」と述べていることからわかるように、はっきりとその立場に立っている (Coe 1999)。しかし、テオティワカンによる侵入や支配が実際にあったとの仮説はまだ説得力に乏しく、少なくとも現時点では尚早であり、困難であるとする。その理由は以下の通りである。

(1) 前章でみたように、テオティワカンがマヤ地域に侵入したと明白に記した碑文は存在しない。「槍投げ器フクロウ」をテオティワカン王としたり、シヤフ・カックをテオティワカンから派遣された将軍的存在とするのは、碑文の恣意的解釈に過ぎない。「槍投げ器フクロウ」をテオティワカンの王と想定するのが困難なことは先に述べた。シヤフ・カックに関しては、エル・ペルーの碑文から彼が西からやって来たと考えられることと、彼が「西のカウィール」という称号を保持していたことを考え併せ、彼の出身地がテオティワカンだから西からやって来たのであり、テオティワカンがマヤ地域の西方に位置するからこそ「西のカウィール」の称号を持っていたというのである。

この説には二つの問題点がある。先ず一つは、この西という方位にどのような意味があるのか、ということである。この問題を考える場合、称号に付帯する「西」と出身の方角としての「西」を峻別する必要がある。前者は「西」を世界観に基づく象徴的なものと捉えており、後者は歴史上の人物の実体験に基づくものとするのである。この両者は全く性質の異なるものであり、混同すべきではないと思われる。

マヤ人にとって、方位には一貫した意味があったが、必ずしも「主要方位」とは一致しないという (Coggins 1980)。マヤ人は世界を四分されたものと認識していたが、その概念を政治的な意味合いでも用いていた可能性がある (Marcus 1976)。それを示すと思われるのが、コパンの石碑Aとセイバル Seibal の石碑10である。9.15.0.0.0 (731年8月19日) に建立されたコパンの石碑Aには、コパンを最上位にしてティカル、カラクムル、パレンケ Palenque の紋章文字が、それぞれ東、西、南、北を表す文字を伴って刻まれている (Marcus 1976)。これは、マヤ地域におけるこれらの都市の地理上の実際の位置とは一致しない。コパンが東を表しているのは、マヤ人の価値観に基づくものであろう。マヤ人にとって太陽が昇る東は最も尊ばれる方位であり (Marcus 1976; Coggins 1980)、だからコパンが東に擬されているのである。また、10.1.0.0.0 (849年11月28日) にセイバルのアフ・ポロン・ハーブタル Aj B'olon Haab'tal 王が奉納した石碑10には、王と思われる3人の重要な人物が、彼が執行した儀礼を 'ilah' 「目撃した」との記述が記されているのだが、彼らの紋章文字はセイバルを筆頭にしてティカル、カラクムル、モトゥール・デ・サン・ホセ Motul de San Jose の順で並んでいる (Marcus 1976; Martin and Grube 2000; Coe and Van Stone 2001)。先のコパンの石碑Aと対比すると、ティカルとカラクムルが同じ順番になっていることがわかる。セイバル

が先頭に来ていることも考え併せて、この4都市も東、西、南、北を表すとみていだろう。これらの石碑の建立年代が120年近く離れていることを考えると、ティカルの一貫した西との結びつきは、マヤ低地におけるティカルの古い地位と何らかのかかわりがあったのかも知れないし、それは古典期前期にまで遡るのかも知れない。

このことを裏付けるとみられる傍証も、いくつか存在する。たとえば、出土地不明の皿に描かれたティカルのワク・チャン・カウィールの名前句には、「西のカロームテ」Och'k'in Kaloomte'sの称号が含まれている (Martin 2003)。また、ティカル出土の骨の MT43 と MT44 に、カラクムルとの抗争に敗れて以来長らく沈滞していたティカルを復興し、古典期後期の繁栄をもたらしたハサウ・チャン・カウィール1世 Jasaw Chan K'awiil I の名が、「西の王」として記されている (Jones 1977)。更に、コパンの石碑15の碑文に、建立した「スイレン・ジャガー」Waterlily Jaguar 王が、王朝の創立者であるキニチ・ヤシュ・クック・モ K'inich Yax K'uk' Mo' の7代目であると記されているのだが (Sharer 2003a)、彼には「西のカロームテ」Och'k'in Kaloomte' という称号が伴っているのである (Stuart 2000)。これはキニチ・ヤシュ・クック・モが「西のカロームテ」として言及された最初の例であるが、以降この称号は、石碑10 (第10代王建立)・P (第11代王建立)・19 (第12代王建立) にキニチ・ヤシュ・クック・モの名と共に生起している (Sharer 2003a)。そして、シヤフ・カックや「槍投げ器フクロウ」と同一の称号を保持するこのキニチ・ヤシュ・クック・モは、ティカルのヤシュ・ヌーン・アイーン1世の治世に刻まれた「ティカルの男」のテキストに名前が見られるクック・モと同一人物であり、恐らくティカル出身でコパンに新王朝を樹立したと考えられている (Martin and Grube 2000; Sharer 2003a; Sharer 2003b)。すなわち、ここでもティカルと「西」が結びついているのである。このように、マヤ人の世界観においては、ティカルは西の存在と認識されていたかも知れないのである。

カロームテという最高主権者の称号に「西」を表す文字が付帯しているもう一つの可能性として、西という方位が持つもう一つの意味が関係しているかも知れない。西は日が沈む方位であることから冥界への入り口であり、死を表すと考えられていたが、同時に戦争も象徴していたというのである (ロンゲーナ 2002)。それは、戦争が生死を賭けて争う試練の場だからであろう。そして、古典期のマヤの王は、即位に先立って他国と戦争して勝利を得、優れた戦争指導者としての資質を有することを証す必要があった。つまり、王たり得るためには、「象徴的な死を経てこの世から冥界へ移動し、そこでさまざまな儀式なり試練なりを通して王位に即くに足る十分な能力があることを示し、また同時にこれらによって神々と人間との仲介者たりうる能力を得、正当な王としてこの地上に生まれ変わるという過程を経るのが普通」(大越 2003) だったというのである。従って、軍事指導者としての有能さをこのような通過儀礼によって証明したことの印として、「西」の文字を誇示したのかも知れない。

次に、西が実際の出発点を表すと考えられる例をみてみたい。ティカルの歴史上、西から来たとされる人物が実際に存在する。先述したハサウ・チャン・カウィール1世の父とされるヌーン・ウ

ホル・チャーク Nuun Ujol Chaakである。彼は、ハサウ・チャン・カウィール1世が記した碑文の中で、「西出身の人」として言及されている (Harrison 1999)。彼の治世は、ティカルから分かれて敵対勢力となったドス・ピラスや、それを後援するカラクムルとの間に熾烈な争いが行われていた時代である。殊にドス・ピラスの場合は、元々が同じ王朝から分かれて生まれた国家なので、王朝内の紛争が時として出来していた可能性もある。彼が西から来たということは、何かそのこととかがわりがあるのかも知れない。

これに対し、シヤフ・カックの場合、西から到来したとの記述は見られない。ティカルの西にあるエル・ペルーの石碑15に「到着」の8日前に到着していたとの記述があったとしても、そのことは彼が更にその西方から来たことを保証しない。つまり、シヤフ・カックがティカルの遥か西方のテオティワカンから来たとの根拠は全くないのである。

二番目の問題点は、仮にシヤフ・カックがテオティワカン出身だとしたら、そのことを明確に主張したはずだということである。4世紀末のテオティワカンは、既に巨大都市の体裁を整えた強大な国家であった⁽²⁰⁾。それに対し、同時代のティカルは、現在見られる古典期後期の最盛期の姿より遥かに貧弱なものであり、両者の国力の差は隔絶していたと思われる。そのような強大な国家を後楯にした人物が、出身国を曖昧な単なる方位で表すとは考え難い。古典期マヤ社会では、王族の娘の名が、他国に嫁いだ後も出身国の紋章文字を伴って表された例が珍しくない。たとえば、先述したナランホの王家に嫁いだドス・ピラス王バラフ・チャン・カウィールの娘「六の空姫」は、ムタル (ドス・ピラス) の紋章文字を伴っているし、またドス・ピラスの「3王」Ruler 3の妻は、出身国のカンクエン Cancuen の紋章文字を伴っている (Martin and Grube 2000)。ましてや当時のメソアメリカを代表する大国テオティワカン出身の人物がティカルを軍事的に征服したのであれば、当然母国の名を誇らしげに記したであろう。それをしなかったのは、シヤフ・カックがテオティワカンとかかわりがなかったからに他ならない。

(2) 「槍投げ器フクロウ」が、これまで名前が判明した誰とも異なる実在の人物であったとしても、テオティワカン王だとする根拠はない。彼がホ・ノフ・ウィッツのカロームテであり、このホ・ノフ・ウィッツという場所をテオティワカンとはみなし難いことは既に述べた。それに加えて、そもそもテオティワカンがどのような政治組織を持っていたのかよくわかっていないのである。端的に言えば、王が存在したかどうかともわからないのである⁽²¹⁾。にもかかわらず、「槍投げ器フクロウ」をテオティワカン王と推定するのは無理がある。テオティワカンが王が統治する国家であったことを示すのが先であろう⁽²²⁾。

(3) 碑文に戦闘への言及がないことは先に述べたが、實際上ティカルは物理的破壊行為を被っていないし、テオティワカンとの軍事的闘争を示す遺物はマヤ地域に皆無である (Braswell 2003a)。「エントラーダ」と同日に死去したとされるチャック・トック・イチャーク1世の住居と考えられている建物 5D-46 も、略奪行為にあっていないし (Harrison 2003)、彼自身の葬儀も十分になされている (Braswell 2003a)。ここには、テオティワカンのような外部勢力による軍事的征服の痕跡

を見ることはできない。

(4) マヤ人とは言語系統の異なるテオティワカン人が圧倒的な武力によってティカルを制圧し、王朝を篡奪したのであれば、碑文に被征服者が用いるマヤ文字を刻んでいるのは理解し難い。テオティワカンには判じ絵的な文字記号はあったが、マヤ文字のような高度に発達した文字はなかった。これは、テオティワカンの文化がマヤ文化よりも劣っていたからではなく、テオティワカン人はマヤ人が用いていたような文字の必要性を感じていなかっただけに過ぎないであろう。仮に支配を容易にするためにマヤの伝統文化を利用したのだとすると、図像にそれまでティカルにはなかったテオティワカン風のモチーフが横溢していることと矛盾する。それでいて支配者の像を刻むなど、マヤでは一般的だがテオティワカンには見られない手法を用いているのである⁽²³⁾。4世紀末のテオティワカンとティカルとでは、国力に雲泥の差があったはずである。軍事的征服に成功したのであれば、当初から現地の文化にこれほど迎合する必要があったとは考えられない。

(5) マヤ地域におけるテオティワカンの直接支配を示すと見られてきた遺物や遺構も、必ずしもテオティワカンの存在を証拠付けるものではない。この点について、特に主要なものについて簡潔にみてみたい。

(a) タルー=タブレーロ様式の建築

タルー=タブレーロ様式は、「タルー=タブレーロのあるところ、テオティワカンの存在あり」(Iglesias Ponce de Leon 2003) といっても過言ではないほど、テオティワカンの影響の証拠として頻繁に挙げられる最もよく知られた指標である。しかし、この様式は先古典期終末期、すなわちテオティワカンとマヤ地域の接触が重要になったとされる時期より前にメソアメリカ一帯に広く分布し、マヤ地域に限ってもベカン Becan、ツイビルチャルトゥン Dzibilchaltun、オシュキントック Oxkintok、リオ・アスル、コパン、セロ・パレンケ Cerro Palenque、イシュティント Ixtinto、ラ・ナヤ La Nayaなど各地で見られる (Laporte 2003a)。しかも、その形態は一樣ではなく、各遺跡毎に異なっており、この建築様式の源が単一ではないことを窺わせる。ティカルにおいても、「失われた世界」で「エントラダ」の100~200年前には既にタルー=タブレーロ様式の最古の例が建築物に用いられており (Laporte 1987)、この様式が先古典期後期以降メソアメリカに広まった特徴であることを裏付けている (Laporte 2003b)。更に、元々は先古典期にトラスカラ=プエブラ Tlaxcala-Puebla 地域内で発展したと考えられているのである⁽²⁴⁾。ちなみに、シヤフ・カックが支配したとみられるワシャクトゥンには、この様式の建築は存在しない (Culbert 1991)。このことも、この様式が「エントラダ」とは無関係であるということの傍証となる。

(b) 緑色黒曜石

緑色黒曜石は、古典期前期から中期の間、メキシコ、プエブラ、トラスカラ、モレーロス Morelos の多くの都市で一般的であり (Spence 1977)、マヤ地域の都市で見られる緑色黒曜石も複数の仲介を通じて到着した可能性がある (Demarest and Foias 1993)。

(c) 土器

ティカルのマニック Manik 3A期(378年-480年)にティカルや他のマヤ低地の遺跡で出土する円筒形三脚土器は、ラットレイ Rattray によると起源はテオティワカンではなくガルフ・コースト Gulf Coast である(Pasztor 1993; Iglesias Ponce de Leon 2003)。また、この時期の最も特徴的な土器指標の一つである薄手オレンジ土器も、テオティワカンでよく見られるものであり、テオティワカンの商人によって交易されたかも知れないが、ラットレイによると製作されたのはテオティワカンではなくプエブラのリオ・カルネーロ Rio Carnero 地区である(Pasztor 1993; Braswell 2003c)。

このように、考古学的観点からも、テオティワカンの侵入を確言できるものはないのである。

4. 「エントラダ」とは何だったのか

テオティワカンの侵略がなかったとしたら、8.17.1.4.12には一体何が起こったのであろうか。これまでの分析を勘案するに、恐らくはティカル王朝内の内紛であろう。しかも、唯一の同時代史料であるワシャクトゥンの石碑5に、シヤフ・カックが明らかに戦士の姿で表されていることから(図4)、戦闘行為を伴っていたと解釈するのが妥当であろう⁽²⁵⁾。碑文に戦争を表す記述が見られないのは、石碑の性格が公的な宣伝であることを考慮に入れればむしろ当然であろう。チャック・トック・イチャーク1世の死を、「水に入る」という曖昧な表現で表しているのもそのせいであろう。戦争によって王位を奪ったのであれば、王位継承が正当に行われたことにならないからである。破壊行為が顕著でなく、また前王チャック・トック・イチャーク1世の葬儀が十分施されているのも、争いが同一リネージ内の権力闘争だったからであろう。いずれも、テオティワカンのような外部勢力による征服が行われたのであれば理解し難いが、内紛であるとすれば得心が行く。すなわち、文化伝統の上で同じ価値観を有する者同士の争いだったからこそ、敗者を物理的に否定するような行為がなされていないのであろう。「到着」といい「旅が終わった」というのも、ティカルを支配する王族から分かれて別の国を支配していた集団が、到頭祖国ともいうべきティカルへの返り咲きを果たしたことを意味するのであろう⁽²⁶⁾。



図4 ワシャクトゥンの石碑5
(Stuart 2000: 図15.7より)

時代は異なるが、このような王位継承の事例はマヤ社会の歴史上確かに存在する。ラス・カサス Las Casas によると、後古典期のキチュー K'iche' 王国は「王」アフポップ Ajpop、「次期王」アフポップ・カムハ Ajpop K'amja と二人の重要な戦争指導者の併せて4人によって治められており、アフ

ポップの跡はアフポップ・カムハが継ぎ、二人の戦争指導者も地位が上昇した。彼らは兄弟や親子であることが通例だったが、必ずしも同族内で王位継承が行われるとは限らず、同族の他の成員や、更にはもっと血縁関係が遠い親類にも王位は移り得た (Braswell 2001)。

第2章でみたように、「エントラーダ」後にティカルのアハウになったのはヤシュ・ヌーン・アイーン1世であり、「槍投げ器フクロウ」の息子であった。そしてそれを後援したのが、明らかにヤシュ・ヌーン・アイーン1世より上位に立つと見られるシヤフ・カックであった。更に、このシヤフ・カックの「到着」を「目撃」あるいは「是認」したのが「槍投げ器フクロウ」であることを考え併せると、後者は前者より優位にある者、恐らくシーリとフレイデルが想定したように兄であろう。すなわち、ティカルの王族の一つに属す家系の出身で、ホ・ノフ・ウィッツという国のカロームテであった「槍投げ器フクロウ」が、ティカルの支配を企図して弟であるシヤフ・カックを実質的指導者としてつけて息子のヤシュ・ヌーン・アイーン1世を送り、最終的に戦いに勝利してティカルを手に入れた。そして、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世を都市ティカルのアハウに即けると同時に、シヤフ・カックをティカル王国の最高権力者のカロームテに即け、近隣のワシャクトゥンに留めてヤシュ・ヌーン・アイーン1世を後援させたのであろう。

ここで、マヤ社会の政治組織上の重要な地位であるアハウとカロームテについて説明しておきたい。マヤ語のアハウは「高貴な人」を表す語であり (ロンゲーナ 2002)、王や王子、貴族の称号として用いられた (Grube 2000)。狭義では、神性に満ちた国家の王ないしは最高支配者を指す称号になった (Coe and Stone 2001)。このように、元々は最高の支配者を意味していたが、ティカルのような大都市が王国として成長するにつれて、より高位の称号が必要となった。それがカロームテである (Harrison 1999)。従って、カロームテが存在するのは、その支配領域が単一の都市より大きいティカルのような大国に限られる。ティカルには複数のアハウが同時に在職し、下位の職としてただ一人の最高権者カロームテに仕えた。カロームテが死ぬと、最高位のアハウが新たなカロームテとして跡を継いだ。「エントラーダ」に関連していえば、シヤフ・カックが先ず378年にチャック・トック・イチャーク1世の跡を襲ってカロームテになり、翌年ヤシュ・ヌーン・アイーン1世をアハウに任命する。そして、シヤフ・カックが402年に死去した後、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世がカロームテに昇叙し、名実共に至高の権力者として統治することになるのである。このように、ティカル王国の統治権は、カロームテとアハウというヒエラルキー上等級付けられた人物の間で分割されていたのである⁽²⁷⁾。恐らくこの当時のティカルとワシャクトゥンは、後のドス・ピラスとアグアテカ *Aguateca* のように、「二都 twin capital」 (Martin and Grube 2000) の関係にあったのではなかろうか⁽²⁸⁾。つまり、シヤフ・カックは最高権力者カロームテの地位に即いたものの、ティカルを彼の跡を継ぐことになっている甥のヤシュ・ヌーン・アイーン1世に譲り、自らはワシャクトゥンに留まってヤシュ・ヌーン・アイーン1世を教導したのであろう。そしてシヤフ・カックが本拠地としたワシャクトゥンには、テオティワカンを想起させる図像は皆無なのである (Culbert 1991)。このように、「エントラーダ」はテオティワカンによる侵略・征服とそれに続く

新王朝の樹立ではなく、広い意味で同一王朝内の権力闘争と考えるべきであろう。

では、「エントラーダ」以降、テオティワカン風の図像がティカルに現れるのをどう説明したらいいのだろうか。これは、恐らくこの当時のメソアメリカ各地の活発な交流を物語るものであろう。そもそも、テオティワカンがティカルを征服したとの考えの根底には、両者の規模の懸隔に由来する先入見があるのではなかろうか。つまり、テオティワカンに見られる文化的要素がティカルに出現するのは、当時の先進国である前者が、後進地域であるマヤ地域に侵入して後者を征服したせいではないかというわけである。このように文化創造者としての能力に関して、テオティワカンに代表される中央メキシコ地域をマヤ地域より優位に置くのは、テオティワカンのメソアメリカにおける発展・拡張を基調とする「古典期中期ホライズン」の概念に通底する考えであり (Valera Torrecilla and Braswell 2003)、「民族差別」「文化差別」の危険性を孕んでいる。

実際のテオティワカンとマヤの関係は、決して前者が後者に影響を与えるだけの一方通行的なものではなかった。テオティワカンの「商人区」Merchants' Barrioではマヤ土器が大量に出土しているし (Demarest and Foias 1993)、都市全体にも少量だが幅広く分布している (Cowgill 2003)。また、ミラー Miller によると、テオティワカン有数の異例の集合住居複合であるテティトラTetitlaの多数の壁画には、豊富なマヤ様式の文字や芸術が見い出され、マヤ地域からの影響が窺える (Taube 2003)。しかも、マヤとテオティワカンは単に双方向の関係にあっただけではない。テオティワカンの文化的要素がマヤ地域を含めて各地で見られるのは、メソアメリカに張り巡らされた複雑な交流のネットワークの中で、テオティワカンが最も傑出しており、最もよく知られているだけのことであり、実際には一構成要素に過ぎない (Demarest and Foias 1993)。つまり、テオティワカンがメソアメリカを支配下におくような商業帝國的な存在で、そこを中心に影響が各地に広がったのでなく⁽²⁹⁾、各地が相互作用ネットワークでつながり、エリート間で思想や物品の交易や交換が行われたのである⁽³⁰⁾ (Millon 1988; Pasztory 1993)。その一例として、テオティワカンのラ・



図5 テオティワカンのラ・ベンティージャの石造モニュメント (Miller1986: 図48より)

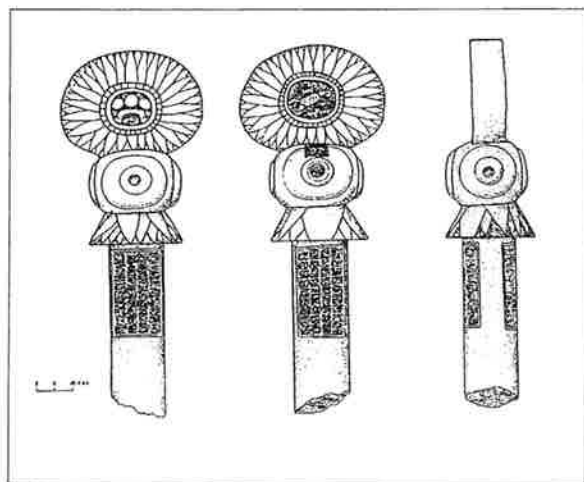


図6 ティカルのマルカドール (Laporte 2003a: 図10.10より)

ベンティージャ La Ventilla で出土した、球戯場の標識と解釈されている石造モニュメントが挙げられる。このモニュメントに酷似した「マルカドール」がティカルに存在し、しかもそれには「エントラダ」について記したテキストが刻まれていることが、テオティワカンによるティカル侵略の傍証の一つとされている。しかし、以下の理由でこの説には従えない。まず、形態である。マーティンとグルーベは、マヤ文字が刻まれていることを除けば、テオティワカンで出土したものと本質的に同一のものであるとしている (Martin and Grube 2000)。確かに両者共、柱状のもの、傘状のもの、球状のもの、円盤状のものが下から上に重なって載るといった形状を呈しているというように、構成の点ではほぼ同じである。しかし、図5・図6から明らかのように、両者の表面の細部は全く異なっている。特に重要だと思われるのは、ラ・ベンティージャの石彫の表面の殆どが、古典期のベラクルス Veracruz 文化を特徴付ける渦巻き模様で覆われているという点である (Miller 1986)。ガルフ・コーストが球戯発祥の地と考えられていることと、テオティワカンにはこの種の石彫が他にはないことを考え併せると、ラ・ベンティージャの石彫はテオティワカンのガルフ・コーストとの交流を表すものであって、決してテオティワカン文化を代表するものではないといえる。しかも、この種の石彫はティカルやテオティワカンだけでなく、ベラクルスのマタカパン Matacapan、グレーロ Guerrero、チアパス Chiapas、カミナルフュー Kaminaljuyu など数カ所で出土している (Taladoire Eric and Benoit Colsenet 1991; Taladoire 2001)。つまり、これも当時のメソアメリカの交流の所産なのである。

更に、ティカルとテオティワカン間の関係は、侵略どころか商業などを含む直接的な接触さえ持続的でなかった可能性もある。たとえば、石碑31の表面に刻まれている肖像である (図7)。中

央のシャフ・チャン・カウール2世を挟んで両側に立つヤシュ・ヌーン・アイーン1世がテオティワカンの戦士風の姿をしているとし、このことがまた後者をテオティワカン出自とみなす根拠とされている。確かに、装い自体はテオティワカン風ではあるが、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世のプロポーションや写実的な表現方法はマヤ様式であり、全体としてテオティワカンの図像伝統の欠如と伝統的なマヤ様式への復帰が明確である

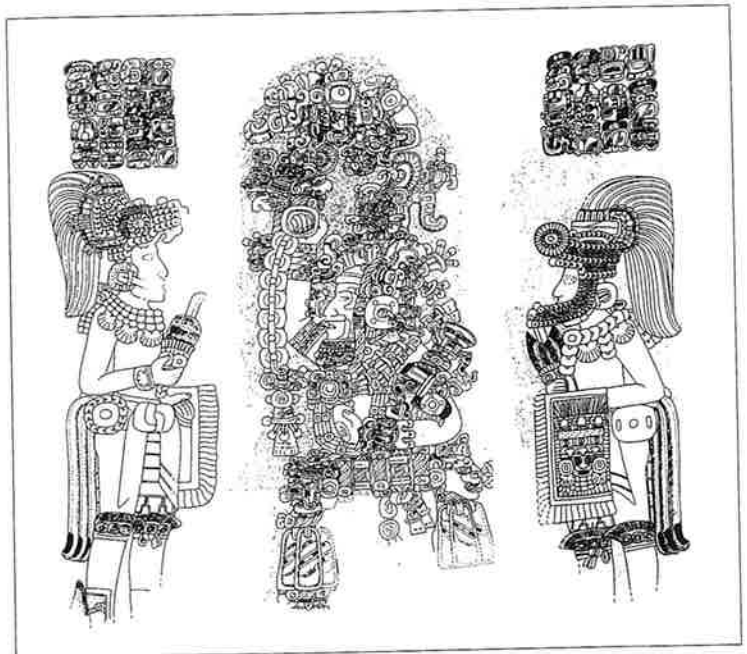


図7 ティカルの石碑31 (Martin and Grube 2000 : p.35より)

(Borowics 2003)。物質文化の点でも、ティカルにはテオティワカンの文化的影響が持続した証拠が稀薄である。テオティワカンの存在がティカルにとって重要であれば、その影響は定着し、残るはずであるが、実際にはマニック 3A期以降、ティカルの物質文化は旧来のマヤの性格を取り戻すのである (Iglesias Ponce de Leon 2003)。それどころか、ティカルで見られるテオティワカンの要素や物品は、テオティワカンから直接来たのではなく、モンテ・アルバン Monte Alban やガルフ・コーストから来た可能性の指摘すらある (Valera Torrecillo and Braswell 2003)。

しかも、この石碑31やワシャクトウンの石碑5にも共通していえることだが、図像に現れるテオティワカンの要素には一つの特徴がある。それは、トラロックTlalocやメキシコの年の印のような、関連したモチーフの複合で現れる傾向があるということであり、マヤ芸術ではこの外来のイメージは戦争のシンボリズムに一般に集中しているということである (Taube 2000)。つまり、テオティワカンの図像は、テオティワカン自体との関係を意味するというより、戦争崇拜に関連していると考えられるのである。事実、テオティワカンの図像は、テオティワカンが滅亡した後の古典期後期末に、ウスマシタ Usumacinta 地域やパシオン Pasion 地域で最も一般的になるが、これは戦争が頻発する時期と重なる⁽³¹⁾ (Demarest and Foias 1993)。軍事力による政治的拡張を推進したこの時期の王達は、自らが軍事指導者として卓越した能力を有することの示威として意図的にテオティワカンのシンボリズムを利用し、テオティワカンの戦士を連想させる姿で自らを表したと考えられるのである。だとすると、「エントラダ」以後にシヤフ・カックがワシャクトウンの石碑5で、またヤシュ・ヌーン・アイーン1世がティカルの石碑31でテオティワカンの戦士風の装いで表されている理由も、ここに求められるかも知れない。つまり、テオティワカンのシンボリズムは戦争のシンボリズムであり、その出現は必ずしもテオティワカン自体の存在を意味しないのである。この点からも、「エントラダ」にテオティワカンの関与を結び付ける必然性はないのである。

5. おわりに

最盛期には、最大限に見積もって25km²近い面積に20万人以上の住民がいたと算定されているテオティワカンは、現在見ても壮大な遺跡である。テオティワカンが滅亡した数百年後にその廃墟を見たアステカ Azteca 人が、その巨大さに驚嘆して人間業とは思えず、「神々の場所」を意味する「テオティワカン」と命名したのも頷ける。ただ懸念するのは、かつてピラミッドに代表される古代エジプト文明の壮大な遺跡や高度な文化を極度に過大視する余り、エジプトを全ての古代文明の発祥の地とする荒唐無稽な説があったように、テオティワカン遺跡の圧倒的規模に幻惑され、テオティワカンを古典期メソアメリカ文明の様々な文化的要素の源に帰しているのではないかということである (Pendergast 2003)。いわば騎馬民族征服王朝説のメソアメリカ版である。騎馬民族征服王朝説は、日本の古墳時代の4世紀後半の中頃以降、古墳の構造や副葬品の性格が東北アジアの騎馬民族のものと極めて類似したものに急激に変わったとして、それを騎馬民族による征服に結びつけたものであるが (江上 1991; 江上・佐原 1989; 佐原 1993)、後進国の文化変化 (と思

えるもの)の原因を先進の大国による征服に求めようとする点で、テオティワカンのティカル征服説に類似していると思えてならない。もう一つ類似しているのは、いずれも決定的な証拠がないということである。文献史料、図像史料にしても、考古学的史料にしても、どう解釈するかによって答えは180度違って来る。それだけに、大胆な説であるほど、慎重にならねばならないと思われる。

本稿は、基本的に碑文史料に依拠したのだが、これにも大きな問題点はある。最大の点は、碑文史料が語ることが事実とは限らないということである。墳墓の副葬品に記された文字史料と異なり、碑文は公共のモニュメントに刻まれたものであり、人々に読まれることを意図したものである。すなわち、プロバガンダの産物である。その性格上、製作者にとって都合の悪いことが記されるとは考えられない。これは世界の歴史上の全ての官製の史書に通ずることである。従って、これに対するには緻密な史料批判が必要となるのだが、解読が進んでいるとはいえ、古典期マヤ社会の文字史料は元々絶対量が多くなく、限界がある。その分、碑文史料以外の史料が重要になってくる。しかし、いずれにしても文字史料がある以上は、記された内容を鵜呑みにすることは禁物にしても、とりあえずはそこを出発点にする他ない。「エントラダ」に関する研究も、文字史料の解読の点でも考古学上の調査の点でもデータがかなり蓄積し、着実な進捗の途上にある。本稿もそれに依拠し、私なりの解釈を提示した。しかしながら现阶段では、「エントラダ」の真相は、霞の中にいるが如く、あるいは逢魔が時にあるが如く、曖昧模糊であるというのが実状であろう。

追記

本年1月26日、闘病僅か10日で「水に入った」敬愛する父に、謹んで小論を捧げたい。父の物心両面に渡る支援がなかったら、私は研究生活に入ることができなかったであろう。はにかみ屋だった父は、定めて泉下で顔をしかめ、「そげなこつせんでもいいに」といっているであろうが。

-
- (1) 石碑などの彫刻モニュメントの出現は、古典期の王朝の性格を考える上で重要である。それ以前のエル・ミラドールは、規模の点では古典期後期のティカルをも凌ぐような巨大建築を擁していたが、肖像を刻むことで王のような特定の個人を強調することがなく、いわば非個人的・匿名的であった。古典期の王権にとって、彫刻モニュメントを建立することは、政権を確立し維持する上で必要な新たな形と考えられたであろうし、そこにはマヤ高地やグアテマラ太平洋岸の伝統的要素の混入が窺われる (Borowicz 2003)。その意味で、先古典期後期の王権と古典期の王権には、性格上大きな乖離があると考えられる。個人の肖像だけでなく、歴史的テキストや埋葬機能の強化などの出現も、王権の性格の変化を反映しているのであろう (Martin 2003)。
 - (2) この文字はティカルの紋章文字である。ティカルは本来はムトゥル Mutul あるいはムタル Mutal と呼ばれていた (Schele and Mathews 1998; Martin 2003)。

- (3) スチュアートは、石碑5のテキストに称号を表す文字が伴っていないことから、シヤフ・カックがティカル出自である確証がないとしているが (Stuart 2000)、これは紋章文字生起の意味を否定するものであり、首肯し難い。
- (4) この王も含め、名前が判明したワシヤクトウン王は皆無である (Jones 1991)。
- (5) この文字の解釈に関しては、スチュアートが異を唱えている。彼も当初は同じ考えだったが、現在は後に述べるように、この文字は 'yi-ta-(hi)' と読み、「目撃する」あるいは「監視する」という意味になるとしている (Stuart 2000)。
- (6) テオティワカンを表すマヤ語はプフ puh、あるいはプ pu だと考えられているが、これはガマの意である。すなわち、メキシコ中央高原自生の植物であるガマが生える場所が、マヤ人や他のメソアメリカ諸民族にとってテオティワカンを想起させる光景だったのである (Schele and Mathews 1998; Stuart 2000)。このことから、ホ・ノフ・ウィッツはテオティワカンではあり得ないし、従って「槍投げ器フクロウ」はテオティワカン王ではあり得ない。
- (7) あるいはマスール Masuul (Reese-Taylor, Kathryn, Peter Mathews, Marc Zender and Ernesto Arredondo Leiva)。
- (8) 類例として、ドス・ピラスが挙げられる。この国を建国したバラフ・チャン・カウィールは、恐らくはティカル王の子供で、ティカルから分かれてペテシュバトゥン地方にドス・ピラスを建てた。「槍投げ器フクロウ」もその先駆け的人物だった可能性がある。ティカルは古典期マヤ社会を代表する大国であり、その王朝の創立は170~235年頃と想定されている (Jones 1991)。従って「槍投げ器フクロウ」の時代には既には少なくとも150年は経過していることになり、多くの王族がいてもおかしくはない。ティカル王朝内部には、平安時代の藤原氏内部で南家・北家・式家・京家が権力を巡って争ったように、王位を巡る同族間の争いがあったのかも知れない。
- (9) 他に石碑4 (8.17.5.0.0) ・ 18 (8.18.0.0.0) (Jones and Satterthwaite 1982)。
- (10) 石碑9 (8.14.10.13.15) ・ 18 (8.10.0.0.0) ・ 19 (8.16.0.0.0) ・ 5 (8.17.1.4.12) ・ 4 (8.18.0.0.0) ・ 17 (8.19.0.0.0) (Morley and Brainerd 1983; Marcus 1976)。
- (11) 石碑12 (8.15.0.0.0) (Morley and Brainerd 1983; Marcus 1976)。
- (12) 石碑5 (8.16.0.0.0) (Morley and Brainerd 1983; Marcus 1976)。
- (13) 石碑4 (8.17.1.5.3) ・ 7 (8.18.???.5) ・ 1 (8.19.10.0.9(?)) (Morley and Brainerd 1983; Marcus 1976)。
- (14) 石碑5 (8.18.8.17.18) (Morley and Brainerd 1983)。
- (15) 石碑1 (8.18.13.5.11) (Morley and Brainerd 1983)。プロスクリアコフは、ヤシュ・ヌーン・アイーン1世の治世に、その息子で次王となるシヤフ・チャン・カウィール2世がウォラントウンに居住していたとし、この石碑に描かれているのが彼かあるいは彼の近親者である可能性を指摘している (Proskouriakoff 1993)。
- (16) たとえばウィリーも、これらの遺跡が近接していることと、ティカルに比べて規模が等しく

- 小さいことから、ティカルによる支配を指唆している (Willey 1977)。
- (17) もっとも、ナーチトゥンを支配下に収めていたとすると、ウォラントゥンはティカルの南東5 km、エル・サポーテは南方25kmに位置しているというように、この両都市は余りにティカルに近過ぎ、逆にナーチトゥンには遠過ぎるので、ホ・ノフ・ウィッツとはみなし難い。
- (18) 「槍投げ器フクロウ」がどこで「目撃」したのかは、このテキストからは明らかではない。マルカドールがティカルで建立されたモニュメントであることを考えると、ティカルで「目撃」したと考えるのが自然であろうが、ホ・ノフ・ウィッツという他国の王である彼がティカルで外来者の「到着」を「目撃」するのは状況として不自然である。興味深いのは、類似したパタンが他でも見られることである。たとえば、カラコル Caracol の石碑3には、オシュウィツハ Oxwitsha 「三つの丘の水」という場所への 'hul' 「到着」を、ある人物が 'y-ila' 「見た」ということが記されている (Stuart and Houston 1994)。また、キリグアー Quirigua の祭壇Lには、コパンの第12代王「煙のイミシュ」Smoke Imix の 'hul-ah' 「到着」を当地の人物が目撃したと記されている。このような類型的な表現の存在から考えると、「到着」に続く「目撃」の記述は、「到着」という出来事を強調しているのかも知れない。
- (19) グェンターは、'chan pa' haab' (?) huli ...Ha' B'ajl(aj) Chan K'awiil ucha'n Taj(al) Mo' K'uh(ul) Ajaw' と解説している (Guenter 2003)。
- (20) テオティワカンの中心部を貫く「死者の大通り」は、パトラチーケ Patlachique 期 (前150-1年) には既に存在していた。巨大な規模を誇る「太陽のピラミッド」も、続くツァクァリ Tzacualli 期 (1-150年) の終り頃には現在見られる威容にほぼ達していたし、20以上の他のピラミッド・コンプレックスもこの時期には存在していた。更にミクカオトリ Miccaotli 期前期 (150-300年) には、一辺400mの広大な広場を囲む大基壇群「シウダデーラ」Ciudadela も建設された。人口の面でも、パトラチーケ期の終りには少なくとも2万人、恐らくは4万人以上を擁し、ツァクァリ期には面積8~20km²、人口6~8万人に達したと考えられている (Cowgill 1992)。このように、「エントラーダ」以前に、テオティワカンはマヤの諸国家が遠く及ばない威容を誇る巨大な国家だったのである (Millon 1981)。
- (21) テオティワカンの政治組織の研究がマヤ社会のそれに比べて遅れている要因の一つは、彼らがマヤ文字のような発達した文字体系を用いていなかったため、文字史料が欠如していることが大きい。それどころか、テオティワカン人がどのような言語を用いていたかも、未だに判明していないのである。
- (22) 近年、「月のピラミッド」の地下で高位にあったとみられる人物の埋葬が見つかるなど、テオティワカンの政治組織解明の糸口になり得る調査が進展しつつあるが、それでもエリートの墳墓の研究に関しては、テオティワカンはマヤ地域に比べて遥かに乏しい (Cowgill 2003)。
- (23) 古典期に入って低地南部マヤ社会に現れた彫刻モニュメントは、王朝による支配に対応するものであった (Borowicz 2003)。その基本的機能は、個々の支配者を讃え、その重要性を公に喧伝

することであった。また出自について述べることで支配の正当性を顕示する意味もあったが、そのために祖先崇拝の手段ともなった (McAnany 1995)。それに対して、テオティワカンには個人を強調するような図像は見られない。描かれている人物は、個性だけでなく、現実の人間であることを示す特徴さえ消し去られている (Pasztor 1993)。ましてやマヤにおけるように、王の功績を讃え誇示したり、先祖について言及するようなことは行われなかった。少なくとも、それらを石という永続的なもので記念することを重要とは考えていなかった (Cowgill 1992)。

- (24) タルー=タブレーロ様式の建築は、2世紀頃までにはこの両地域に現れている (Garcia Cook 1981; Plunket and Urunuela 1998; Braswell 2003a; Cowgill 2003)。
- (25) 4世紀後半になって初めてマヤの王は戦士として描かれたのだが、それでもマヤ人が武器を持った姿で描かれるのは、古典期後期までは一般的でない (Coggins 1980; McAnany 2001)。ちなみにスチュアートは、この肖像でシヤフ・カックが右手にアトラトル *atlatl* (槍投げ器) のような武器を持っていることから、これをテオティワカンの姿だとしているが (Stuart 2000)、後ろに長く垂れ下がる高い羽毛の頭飾りはテオティワカンよりもマヤ地域などで一般的な服装であり (Coggins 1983)、これをもって必ずしもテオティワカン風戦士の姿とはいえない。
- (26) この観点からみると、後継者がいないままチャック・トック・イチャーク1世が死去した後、アハウ位を継承できる最近縁者ヤシュ・ヌーン・アイーン1世が跡を継いだとするプラスウエルの説 (Braswell 2003a) も成立し得る。この場合、平和裡に王位継承が行われたわけだから碑文に戦争の記述がないのは当然である。実際、「エントラダ」以前のティカルの王位継承をみると、必ずしも父子継承が行われていない事例が散見する。たとえば、第11代王のシヤフ・チャン・カウィール1世の跡を継いだ第12代王は、女性のウネ・バラム姫 *Lady Une' Balam* である。シヤフ・チャン・カウィール1世とウネ・バラム姫の関係はわかっていないが、いずれにせよこの頃王位を継ぎ得る男子がいない事態が出来たと考えられる。その跡を継いだ第13代王キニチ・ムワーン・ホル *K'inich Muwaan Jol* とウネ・バラム姫の関係もわかっていない。チャック・トック・イチャーク1世が死去した時も、ティカル王国内に後継者たり得る者が王族にいない事態が生じ、同じリネージが建国したホ・ノフ・ウィツツ王の「槍投げ器フクロウ」に息子を猶子として招請したのかも知れない。
- (27) このような分割統治の例は、後古典期のマヤ高地でも知られている。たとえば、カクチケル *Kaqchikel* 王国の首都イシムチェ *Iximche'* では、アフポップ・ソツィル *Ajpop Sotzil* とアフポップ・シャヒル *Ajpop Xahil* という二人の貴族が権力を分有していたが、更に後に追放される王国内の大派閥だったトゥクチェ *Tuquche'* の長アマック *amaq'* も同等の地位を保持していたかも知れないという (Braswell 2001)。また、アフポップ、アフポップ・カムハと二人の重要な戦争指導者によって治められていたキチエー王国も、分割統治の好例である。
- (28) 従って、ワシャクトウンの石碑5に記されたシヤフ・カックの「到着」は、ワシャクトウン自

- 体というより、ワシャクトウンも含むティカル王国への「到着」を意味するのかもしれない。
- (29) ただし、テオティワカンはいわばコスモポリタンな多民族都市だったようで、そこにはマヤ地域だけでなく、ガルフ・コースト、オアハカ Oaxaca、ミチョアカン Michoacan やグアナフアト Guanajuato など西部メキシコ出身の人々が居住していた (Taube 2003)。
- (30) これらの交易・交換は都市のエリート間に限定されていたようである (Iglesias Ponce de Leon 2003)。このことは、外来文化の特徴の顕現が公的な記念建築やエリートの埋葬に限定されていることから明らかであり (Valera Torrecilla and Braswell 2003)、また言語の分析もこれを支持している (Justeson et al. 1983)。恐らくは外国とのつながりを示唆することで、自らの権力、富、地位などの強化を企図したのであろう (Braswell 2003a)。
- (31) ストーンは、テオティワカン・コンプレックスの生起が、軍事的侵略に従事する強力で野心的な王の治世と重なり、具体的にティカルのハサウ・チャン・カウィール1世、ナランホのカック・ティリウ・チャン・チャーク、ヤシュチラン Yaxchilan のイツァムナーフ・バラム1世 Itzamnaaj B'alam I と「鳥ジャガー」1世、ドス・ピラスの「3王」、ボナムパック Bonampak のヤハウ・チャン・ムワーン Yajaw Chan Muwaan を挙げている (Stone 1989)。

引用文献

- Adams, Richard E.W. (1999) *Rio Azul: An Ancient Maya City*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Ayala Falcon, Maricela (1987) La estela 39 de Tikal, Mundo Perdido. In *Memorias del primer coloquio internacional de mayistas: 599-654*. Instituto de Investigaciones Filológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México, D.F.
- Becker, Marshall Joseph (1983) Kings and Classicism: Political Change in the Maya Lowlands During the Classic Period. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches* (Miller, Arthur G., ed.): 159-200. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Boot, Erik (2002) The Life and Times of B'alah Chan K'awiil of Mutal (Dos Pilas), According to Dos Pilas Hieroglyphic Stairway 2. <http://www.mesoweb.com/features/boot/DPLHS2.html>
- Borowicz, James (2003) Images of Power and the Power of Images: Early Classic Iconographic Programs of the Carved Monuments of Tikal. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 217-34. University of Texas Press, Austin.
- Braswell, Geoffrey E. (2001) Postclassic Maya Courts of the Guatemalan Highlands: Archaeological and Ethnohistorical Approaches. In *Royal Courts of the Ancient Maya, Vol.2* (Inomata, Takeshi and Stephen D. Houston, eds.): 308-31. Westview Press, Boulder.

- Braswell, Geoffrey E. (2003a) Introduction: Reinterpreting Early Classic Interaction. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 1-43. University of Texas Press, Austin.
- Braswell, Geoffrey E. (2003b) Dating Early Classic Interaction between Kaminaljuyu and Central Mexico. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 81-104. University of Texas Press, Austin.
- Coe, Michael D. (1999) *The Maya*, Sixth Edition. Thames and Hudson Ltd, London.
- Coe, Michael D. and Mark Van Stone (2001) *Reading the Maya Glyphs*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Coggins, Clemency (1979) A New Order and the Role of the Calendar: Some Characteristics of the Middle Classic Period at Tikal. In *Maya Archaeology and Ethnohistory* (Hammond, Norman and Gordon R. Willey, eds.): 38-50. University of Texas Press, Austin.
- Coggins, Clemency (1980) The Shape of Time: Some Political Implications of a Four-Part Figure. *American Antiquity* 45: 727-39.
- Coggins, Clemency (1983) An Instrument of Expansion: Monte Alban, Teotihuacan, and Tikal. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches* (Miller, Arthur G., ed.): 49-68. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington, D.C.
- Cowgill, George L. (1979) Teotihuacan, Internal Militaristic Competition, and the Fall of the Classic Maya. In *Maya Archaeology and Ethnohistory* (Hammond, Norman and Gordon R. Willey, eds.): 51-62. University of Texas Press, Austin.
- Cowgill, George L. (1992) Toward a Political History of Teotihuacan. In *Ideology and Pre-Columbian Civilizations* (Demarest, Arthur A. and Geoffrey W. Conrad, eds.): 87-114. *School of American Research Press*, Santa Fe.
- Cowgill, George L. (2003) Teotihuacan and Early Classic Interaction: A Perspective from Outside the Maya Region. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 315-35. University of Texas Press, Austin.
- Culbert, T. Patrick (1991) Politics in the Northeast Peten. In *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence* (Culbert, T. Patrick ed.): 128-46. *Cambridge University Press*, Cambridge.
- Demarest, Arthur A. and Antonia E. Foias (1993) Mesoamerican Horizons and the Cultural Transformations of Maya Civilization. In *Latin American Horizons* (Rice, Don Stephen, ed.): 147-91, *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington, D.C..
- 江上波夫 (1991) 『騎馬民族国家—日本古代史へのアプローチ』 中公新書
- 江上波夫・佐原真 (1989) 『騎馬民族は来た!? 来ない!?』 小学館

- Fash, William L. and Barbara W. Fash (2000) Teotihuacan and the Maya: A Classic Heritage. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs* (Carrasco, David, Lindsay Jones and Scott Sessions, eds.): 433-63. University Press of Colorado, Boulder.
- Garcia Cook, Angel (1981) The Historical Importance of Tlaxcala in the Cultural Development of the Central Highlands. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, Vol. 1: Archaeology* (Sabloff, Jeremy A. ed.):244-76. University of Texas Press, Austin.
- Grube, Nikolai, ed. (2000) *Maya: Divine kings of the Rain Forest*. Koenemann Verlagsgesellschaft mbH, Cologne.
- Guenter, Stanley Paul (2003) The Inscriptions of Dos Pilas Associated with B'ajlaj Chan K'awiil. <http://www.mesoweb.com/features/guenter/DosPilas.html>
- Harrison, Peter D. (1999) *The Lords of Tikal: Rulers of an Ancient Maya City*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Harrison, Peter D. (2003) The Central Acropolis of Tikal. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.):171-206. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Jones, Christopher (1977) Inauguration Dates of Three Late Classic Rulers of Tikal, Guatemala. *American Antiquity* 42 : 28-60
- Iglesias Ponce de Leon, Maria Josefa (2003) Problematical Deposits and the Problem of Interaction: The Material Culture of Tikal during the Early Classic Period. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 167-98. University of Texas Press, Austin.
- Jones, Christopher (1991) Cycles of Growth at Tikal. In *Classic Maya Political History: Hieroglyphic and Archaeological Evidence* (Culbert, T. Patrick ed.): 102-27. Cambridge University Press, Cambridge.
- Jones, Christopher and Linton Satterthwaite, Jr. (1982) The Monuments and Inscriptions of Tikal: The Curved Monuments. Tikal Reports no.33A. University Museum Publications, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Justeson, John S., William M. Norman, Lyle Campbell and Terrence Kaufman (1983) The Foreign Impact on Lowland Mayan Language and Script: A Summary. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches* (Miller, Arthur G., ed.): 147-58. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington, D.C.
- Laporte, Juan Pedro (1987) El "talud-tablero" en Tikal, Peten: Nuevos datos. In *Homenaje a Roman Piña Chan*. (Dahlgren, Barbro, Carlos Navarrette, Lorenzo Ochoa, Mari Carmen Serra

- Puche and Yoko Sugiura, eds.): 265-316. Instituto de Investigaciones Antropológicas, Universidad Nacional Autónoma de México, México D.F.
- Laporte, Juan Pedro (2003a) *Thirty Years Later: Some Results of Recent Investigations in Tikal*. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.): 281-318. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Laporte, Juan Pedro (2003b) *Architectural Aspects of Interaction between Tikal and Teotihuacan during the Early Classic Period*. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 199-216. University of Texas Press, Austin.
- Laporte, Juan Pedro and Vilma Fialco C. (1990) *New Perspectives on Old Problems: Dynastic References for the Early Classic at Tikal*. In *Vision and Revision in Maya Studies* (Clancy, Flora S. and Peter D. Harrison eds.): 33-66. The University of New Mexico Press, Albuquerque.
- ロンゲーナ、マリア (2002) 『図説マヤ文字事典』 創元社
- Marcus, Joyce (1976) *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Harvard University, Washington D.C.
- Marcus, Joyce (2003) *The Maya and Teotihuacan*. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 337-56. University of Texas Press, Austin.
- Martin, Simon (2001) *Unmasking "Double Bird", Ruler of Tikal*. *PARI Journal* 2(1): 7-12. Pre-Columbian Art Research Institute, San Francisco.
- Martin, Simon (2003) *In Line of the Founder: A View of Dynamic Politics at Tikal*. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.): 3-45. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Martin, Simon and Nikolai Grube (2000) *Chronicle of the Maya Kings and Queens: Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Mathews, Peter (1985) *Maya Early Classic Monuments and Inscriptions*. In *A Consideration of the Early Classic Period in the Maya Lowlands* (Willey, Gordon R. and Peter Mathews, eds.): 5-54. Institute for Mesoamerican Studies, State University of New York at Albany, Albany.
- McAnany, Patricia A. (1995) *Living with the Ancestors*. University of Texas Press, Austin.
- McAnany, Patricia A. (2001) *Cosmology and Institutionalization of Hierarchy in the Maya Region*. In *From Leaders to Rulers* (Haas, Jonathan, ed.): 125-48. Kluwer Academic / Plenum Publishers, New York.

- Miller Mary Ellen (1986) *The Art of Mesoamerica from Olmec to Aztec*. Thames and Hudson Ltd, London.
- Miller, Mary Ellen and Karl Taube (1993) *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson Ltd, London
- Millon, Rene (1981) *Teotihuacan: City, State, and Civilization*. In *Supplement to the Handbook of Middle American Indians, Vol. 1: Archaeology* (Sabloff, Jeremy A. ed.):198-243. University of Texas Press, Austin.
- Millon, Rene (1988) *The Last Years of Teotihuacan Dominance*. In *The Collapse of Ancient States and Civilizations* (Yoffee, Norman and George Cowgill, eds.): 102-64. University of Arizona Press, Tucson.
- Moholy-Nagy, Hattula (2003) *Beyond the Catalog: The Chronology and Contexts of Tikal Artifacts*. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.):83-110. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Morley, Sylvanus G. and George W. Brainerd (Sharer, Robert J. rev.). (1983) *The Ancient Maya, Fourth Edition*. Stanford University Press, Stanford.
- 大越翼 (2003) 「聖なる樹の下で－マヤの王を考える－」、『古代王権の誕生 II 東南アジア・南アジア・アメリカ大陸編』(角田文衛・上田正昭監修)、角川書店、169-205頁。
- Parsons, L. (1969) *Bilbao, Guatemala: An Archaeological Study of the Pacific Coast Cotzumalhuapa Region*. Publication in Anthropology, no.11-12. Milwaukee Public Museum, Milwaukee.
- Pasztor, Esther (1993) *An Image is Worth a Thousand Words: Teotihuacan and the Meanings of Style in Classic Mesoamerica*. In *Latin American Horizons* (Rice, Don Stephen, ed.):113-45. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Pendergast, David M. (2003) *Teotihuacan at Altun Ha: Did it Make a Difference?* In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 235-47. University of Texas Press, Austin.
- Plunket, Patricia and Gabriela Urnuela (1998) *Preclassic Household Patterns Preserved under Volcanic Ash at Tetimpa, Puebla, Mexico*. *Latin American Antiquity* 9: 287-309.
- Proskouriakoff, Tatiana (1993) *Maya History*. University of Texas Press, Austin.
- Rathje, William L. (1971) *The Origin and Development of Lowland Maya Classic Civilization*. *American Antiquity* 36: 275-85.
- Reese-Taylor, Kathryn and Debra S. Walker (2002) *The Passage of the Late Preclassic into the Early Classic*. In *Ancient Maya Political Economies* (Masson, Marilyn and David A.

- Freidel, eds.):87-122. Altamira Prss, Walnut Creek.
- Reese-Taylor, Kathryn, Peter Mathews, Marc Zender and Ernesto Arredondo Leiva
Naachtun: A Lost City of the Maya. <http://www.bbc.co.uk/history/>
- 佐原真 (1993) 『騎馬民族は来なかった』 日本放送協会
- Sanders, William T. and Barbara J. Price (1968) *Mesoamerica: The Evolution of a Civilization*. Random House, New York.
- Santley, Robert S. (1983) *Obsidian Trade and Teotihuacan Influence in Mesoamerica*. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches* (Miller, Arthur G., ed.): 69-124. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Schele, Linda and David Freidel (1990) *A Forest of Kings: The Untold History of the Ancient Maya*. William Morrow and Co., New York.
- Schele, Linda and Peter Mathews (1998) *The Code of Kings: The Language of Seven Sacred Maya Temples and Tombs*. Scribner, New York.
- Sharer, Robert J. (1983) *Interdisciplinary Approaches to the Study of Mesoamerican Highland-Lowland Interaction: A Summary View*. In *Highland-Lowland Interaction in Mesoamerica: Interdisciplinary Approaches* (Miller, Arthur G., ed.): 241-63. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Sharer, Robert J. (1994) *The Ancient Maya, Fifth Edition*. Stanford University Press, Stanford.
- Sharer, Robert J. (2003a) *Tikal and the Copan Dynastic Founding*. In *Tikal: Dynasties, Foreigners, & Affairs of State* (Sabloff, Jeremy A., ed.):319-53. School of American Research Advanced Seminar Series, School of American Research Press, Santa Fe.
- Sharer, Robert J. (2003b) *Founding Events and Teotihuacan: Connections at Copan, Honduras*. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 143-65. University of Texas Press, Austin.
- Stone, Andrea (1989) *Disconnection, Foreign Insignia, and Political Expansion: Teotihuacan and the Warrior Stelae of Piedras Negras*. In *Mesoamerica After the Decline of Teotihuacan A.D.700-900*. (Diehl, Richard A. and Janet Catherine Berlo, eds.): 153-72. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C..
- Stuart, David (2000) "The Arrival of Strangers": Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs* (Carrasco, David, Lindsay Jones and Scott Sessions, eds.): 465-513. University Press of Colorado, Boulder.
- Stuart, David and Stephen Houston (1994) *Classic Maya Place Names*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

- Taladoire, Eric (2001) *The Architectural Background of the Pre-Hispanic Ballgame: An Evolutional Perspective*. In *The Sport of Life and Death: The Mesoamerican Ballgame* (Whittington, Michael E. ed.): 88-95. Thames and Hudson Inc, New York.
- Taladoire, Eric and Benoit Colsenet (1991) "Bois Ton Sang, Beaumanoire": *The Political and Conflictual Aspects of the Ballgame in the Northern Chiapas Area*. In *The Mesoamerican Ballgame* (Scarborough, Vernon L. and David R. Wilcox eds.): 161-94. The University of Arizona Press, Tucson.
- Taube, Karl A. (2003) *Tetitla and the Maya Presence at Teotihuacan*. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 273-314. University of Texas Press, Austin.
- Torrecilla, Carmen Varela and Geoffrey E. Braswell (2003) *Teotihuacan and Oxkintok: New Perspectives from Yucatan*. In *The Maya and Teotihuacan: Reinterpreting Early Classic Interaction* (Braswell, Geoffrey E., ed.): 249-71. University of Texas Press, Austin.
- Willey, Gordon R. (1977) *The Rise of Classic Maya Civilization: A Pasion Valley Perspective*. In *The Origins of Maya Civilization* (Adams, Richard E.W. ed.): 133-57. School of American Research, University of New Mexico Press, Albuquerque.